関係障害臨床からみた多動

小林隆児（こばやしりゅうじ）●東海大学健康科学部教授

はじめに

この数年、児童精神医学の臨床現場で落ちつきのない子どもの相談が増えてきているらしい。筆者の印象でも、落ちつきがなかったり、些細なことで激しい衝動行為に走りやすい子どもによく出会うようになったように思う。筆者に与えられた課題は「自閉症にみられる多動」について論じることである。自閉症の子どもの多くは特に幼児期、落ちつきのなさや多動傾向が顕著である。今ではこのような行動特徴を脳機能障害との関連でもって捉えられることが多いが、本稿では筆者の実践する関係障害臨床の立場から、多動が自閉症に限らずその近縁の病態（自閉症圏障害）とどのような関連を持っているかを論じてみたい。

関係障害臨床という立場

これまで自閉症の病態は、心因論にしろ、器質論にしろ、個体能力の問題として捉えられ、原因を環境か個体か、そのどちらかに特定化しようとする接近方法が試みられてきた。筆者は自閉症にみられる病態を、コミュニケーションの当事者である子どもとその養育者（あるいは治療者、療育者も含めて）との関係障害として捉え、治療介入を実践している。つまり自閉症にみられる対人関係の障害をコミュニケーション形成過程における問題とみなし、母子間（あるいは子どもと療育者の間で）のコミュニケーションの成立を目指した治療介入を試みている。そこでは子どもの病態（ここではとくにコミュニケーションに関する問題を指しているが）を個体能力の障害とはみなさず、気質などの子どもの個体側の要因と、養育者や療育者の関与のあり方などの環境側の要因との間で複雑な交互作用によってもたらされた結果として、子どもの現在の状態が表現されているものとみなされている。

自閉症の病態を関係障害とみなす際に重要となるのは、関係のあり方を力動的に捉えることであるが、筆者は特にコミュニケーション形成過程の問題として捉えて考えてみようと思う。そこでまずコミュニケーションの構造について考えてみよう。なおここではコミュニケーションを、存在するお互いの一方が他方に何らかの影響を及ぼすこと、と定義している。

コミュニケーションの二重構造

コミュニケーションには情報の授受という象徴水準の他に、気持ちが通底するという情動水準のコミュニケーションがある。象徴水準ではインターネットに代表されるように情報が一方から他方へと双方向性をもち、かつ時差を伴って周辺に伝わっていく。しかし、情動水準のそれは、ちょうど同じ振動数の音叉をふたつ並べて、一方の音叉を振動すると、他方の音叉も同じように共振する現象と似通っているとされている。すなわち、情動の世界では当事者双方が身体そのものでもって共鳴し合うような性質をもち、かつ同時的なものであるという。図1はこのようなコミュニケーションの二重構造を示したものである。

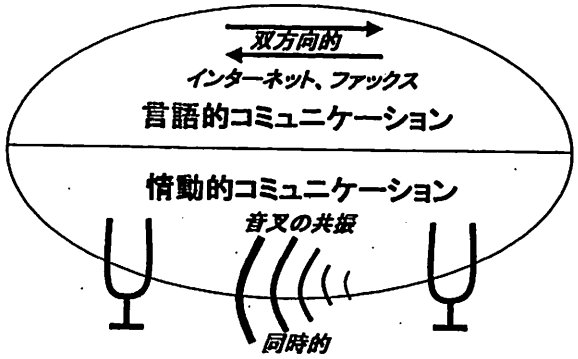

図1　コミュニケーションの二重構造

コミュニケーションの構造とずれ

AとBの二者におけるコミュニケーション構造を想定し

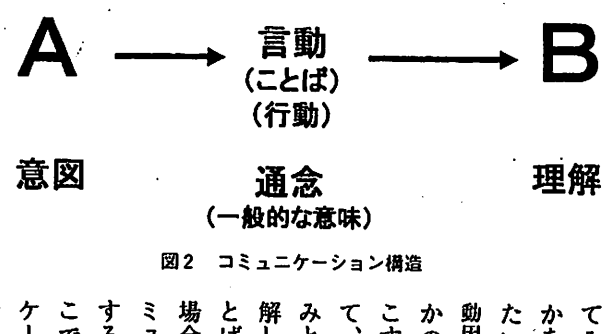

図2　コミュニケーション構造

てみよう（図2）。AがBに何かを伝えたい、わかってもらいたいという気持ち（意図ないし動因）が高まると、Aはなんらかの言動（ことばや行動）を起こす。その言動をBは受け止めて、そこになんらかの意味を読みとり、Aの伝えたいことを理解しようとする。ふたりともことばを用いることに問題がない場合には、一般にこのようなコミュニケーションの構造を想定することができよう。ただ、ここでAの心に生じたコミュニケーションの意図とAの実際に発した言動との間には、必ず多少なりともずれが生じる。自分が相手に伝えたいというなんらかのイメージを、主にことばによって伝えようとするが、自分の心の中に浮かんだイメージをことばによって表現すること自体なかなか難しいことである。自分の伝えたいことをそのままの形で伝えることがどんなに大変なことか、誰しも日頃痛感するところである。

またAが用いたことばに対して自分で抱くイメージとBがそのことばを受け止める際に心に浮かべるイメージは、けっして同一ではない。勿論、同じ言語を用いている国民同士であれば、共通の文化的体験を積み重ねていることが多いので、ことばによるコミュニケーションが可能になるのであるが、そこにおいてもことばに対するイメージの微妙なずれによって、コミュニケーションにおける様々なずれは起こりうる。このようなずれは、コミュニケーションそのものに本質的に存在するのであって、コミュニケーションにずれが起こること自体が病理的ということではない。

同じ言語をある程度自由に操れる人同士の間でも、コミュニケーションのずれが多少なりとも必ず生じるものだとすれば、ことばが自由に操れない、ないしはまったくことばを用いることができない子どもとわれわれ（養育者、治療者、療育者など）の間でのコミュニケーションの難しさは想像に難くない。ただ、ここで重要なことは、本質的にずれをもたらす構造をもっているコミュニケーションにおいて、そのずれを少なく、ないしはなくすための機能が情動水準のコミュニケーションに存在する。ある情動（快／不快、喜／怒、哀／楽など）が一方に生じると他方にもその情動が共振することによって両者はその情動を分かち合う

ことになる。このようなコミュニケーションの世界では、両者間に共有された情動は同質のものであるといえよう。コミュニケーションのずれが日頃は深刻な問題とならないのは、情動的コミュニケーションの働きによるところが大きい。

コミュニケーション構造と多動

多動な子どもとわれわれとの間でどのようなコミュニケーションが展開しやすいかを考えてみよう。図3のようなC（多動な子ども）とD（養育者、治療者または療育者）の二者間のコミュニケーション構造を想定してみよう。Cがなんらかの意図をもって行動したとしよう。たとえば、目の前の物体がおもしろそうだ、触ってみたい、という気持ちがCに生じる。Cは当然それを扱おうとする。ここで問題となるのは、Cのような多動な子どもが表出する行動（ここで「表出」としたのは、Cにはいまだ明確な意志表現としての表現活動をとっていないと考えたからであるが）がDにはどのように感じられ、理解されるだろうか。多動な子どもは衝動性がとても高いので、彼らの表出する行動は大半の場合、受け止める側の人には不快な感情を引き起こす。いわゆる乱暴な振る舞いといってよかろう。不快な感情が生じたDはCに対して思わず制止したり、強い調子で叱りつけたり、危険を感じて反射的に回避的行動をとったりするだろう。勿論、受け止める人によって感じ方は異なるから、一概にはいえないが、不快な感情が生じてくるのは避けがたいだろう。

ここではCの行動の意図いかんにかかわらず、その行動が衝動的であるがゆえに、DはCの行動に対して否定的な構えをとってしまいやすいだろう。

その際、Dが否定的な構えで応答すれば、Cは自分の意図を受け

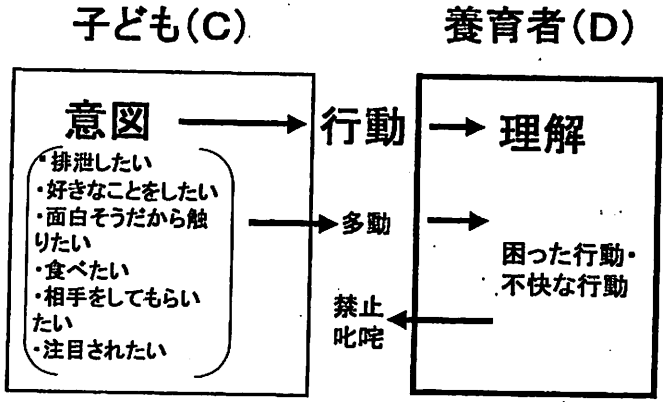

図3　コミュニケーション構造から見た多動

止めてもらえず、Dによって突き放されたと感じるだろう。

多動な子どもとの関係にみられる行動と意図の乖離

ここで重要なことは、人間の行動それ自体にもともとある特定の意味が存在するのではないということである。

行動を起こす主体の主観（意図）や受け止める側の主観（意味づけ）によって行動それ自体の意味は容易に変化しうる。文脈依存的なのである。ただ行動それ自体が社会化されて、なんらかのコミュニケーション的な意味をもつ（非言語的コミュニケーション）ようになるのは、生誕後の養育者をはじめとした多くの人々との交流があってこそなのである。

乳児の表出する行動が最初から社会的意味を持つのは、受け止める側の養育者の果たしている役割が大きい。つまり養育者は乳児の仕草に最初からなんらかの社会的意味をもったものとして受け止めていく。そこで重要なことは養育者が乳児の行動の意図または心の動き（ここではまだ乳児自身には明確に自覚されていないだろうが）を察知しながら、乳児の行動を意味づけていくので、乳児にとってそこでの体験は自分の意図を養育者に分かち合えてもらった喜びと、さらには養育者の期待ともからみあって次第に乳児の行動は社会化していくとみなせようか。

多動な子どもが示す多くの行動は、乳児のように思わず保護したくなるような愛くるしい仕草とは異なり、衝動的で荒々しいために、養育者ならずとも多くの大人はつい否定的に捉えて対応することになりやすい。多動な子ども自身が最初から荒々しく乱暴に振る舞おうと意図して行動しているのではないだろう。自分でも制御困難なほどに衝動性が亢進し、些細な外的ないしは内的な刺激によって容易に衝動的な行動をとってしまうのであろう。この段階では彼らの行動は、なんらかのコミュニケーションの意図をもって、つまりは非言語的コミュニケーションとして行動表現をしているのではなかろう。ただ行動として表出してしまい、それを受け止める側が攻撃的であるとか、乱暴だと意味づけてしまいやすい。

このようなコミュニケーション構造における行動と意図との間の大きなずれを伴った関係での体験が蓄積していくと、子どもは養育者によって向けられたまなざしを通して否定的な自己イメージを形成していくことになっていくであろうことは容易に想像されるであろう。言語認知機能の獲得過程に重大な問題をもつ自閉症の子どもでは、長期的に深刻な影響を及ぼすことになる。

多動と愛着形成障害

多動な子どもと養育者の間でもっとも深刻な問題のひとつとなるのは、愛着形成の困難さである。多動な子どもはけっして養育者に対して愛着行動をとらないということではないが、乳幼児期早期の彼らを抱っこしてみると、一時もじっとしておらず、抱かれることに不快な反応を示して、すぐに離れようとする。養育者は彼らとの間でしっとりと心地よい情動を分かち合うという体験を持ちがたい。衝動性の高さ、敏感さ、注意集中困難さなどのために、養育者との間で愛着関係が容易には深まりにくいのである。

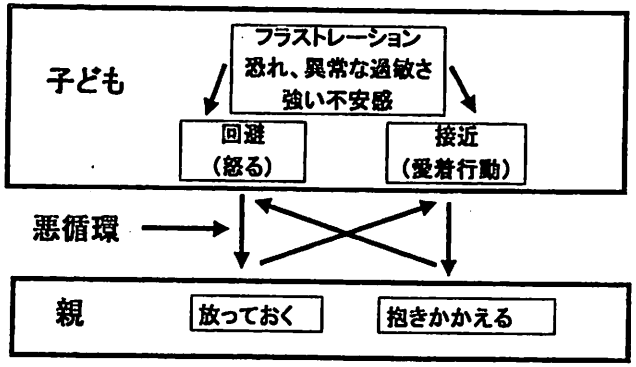

図4　接近・回避動因的葛藤の悪循環（Richer,1993）

多動な子どもに対する母子治療を行ってみてわかったのだが、自閉症のみならず彼らにも接近・回避動因的葛藤の悪循環（図4）が生じやすい。接近・回避動因的葛藤はリッチャー（一九九三）の提起した比較行動学的概念であるが、このような葛藤状態に陥りやすい子どもは、強い欲求不満、恐れ、不安感を抱きやすい傾向を有し、彼らは回避欲求が非常に強いために、接近行動を起こしてもいざ親から抱きかかえられそうになると回避行動が誘発され、さらに回避行動を起こして親から放置されると接近行動が誘発されるという悪循環を繰り返す。そのため両者間に愛着関係が容易には成立しがたい。このような特徴を持つがために、愛着形成が困難になる。

このような関係性の中では、先のような子どもの行動に対する養育者の反応は、自分が養育者から放り出されるような不安を子どもに引き起こしやすく、引き離されそうになると、逆に子どもは養育者への接近欲求が高まっていく。

しかし、実際に表出する行動は衝動的であるがために養育者はつい禁止や叱咤を繰り返しやすい。多動な子どもとその養育者との間ではこのような悪循環が生じやすい。

このような関係障害を呈している幼児期早期の子どもと養育者に対する母子治療を行ってみると、この悪循環は急速に改善して子どもに愛着行動が顕著に認められるようになっていく。養育者がこの愛着行動をうまく受け止めていくことができると、しだいに子どものそれまでの衝動的で激しかった行動は次第に緩和されて穏やかで子どもらしいかわいい印象を抱かせるものへと変化を遂げていく。そうなると関係は好ましい循環を生み、養育者は子どもの意図を容易に察知できるようになり、子どもも自分の意図が養育者と分かち合えた喜びによって行動は相互により伝わりやすいものへと変容を遂げていく。

子どもの愛着行動と養育者が心に抱くイメージ

ただ治療介入で子どもの愛着行動が顕著になってきたにもかかわらず、その後の回復過程が容易には進行しない例が少なからずある。たとえば、子どもの愛着行動出現という劇的な変化（と治療者には映るのであるが）が養育者には感じ取れないことがある。時には、子どものそのような行動を否定的に受け止めてしまうこともある。このように子どもの愛着行動に対して養育者が抱くイメージはけっして単純ではない。

愛着行動に限らず、子どもの行動に対して養育者が心に抱くイメージは、意識、前意識、無意識の三つの水準から構成されている。眼前の子どもの行動の背後にある意図を察知して行動の意味を読みとることが、本来の望ましい意識水準でのイメージかもしれない。まさにありのままの子どもの姿を捉えているということになろう。しかし、われわれはけっして常にありのままに子どもの姿を捉えているわけではなく、巷のゆがんだものの見方や価値観などに強く影響を受けながら子どもの姿を捉えて判断し、対応しているというのが現実かもしれない。それは前意識水準での現象である。さらには、われわれが子ども時代の養育体験の質（親にどのように育てられ、そこでどのような情緒的体験をしたか、といったことがら）が今の親子関係の質に反映するという事実である。このような現象は世代間伝達といわれ、今日では親の精神病理が子どもに伝達するということで問題視されてはいるのであるが、けっしてこのような現象がすべて病的であるというわけではない。意識、前意識、無意識水準の三つの層が複雑に絡み合いながら人は人と相対して関係を取り結んでいるのが現実の姿なのであって、こ

のような現象は誰にでも現実には起こっていることなのである。問題としなくてはならないのは、このような複雑な人間関係が現実には展開しているにもかかわらず、子どもの問題となると短絡的に行動のみを取り出して、問題行動とか、異常行動だとみなし、それを子どもの能力障害とみなそうとする動きが子どもを取り巻く環境に氾濫している現実である。

おわりに

筆者のこれまでの自閉症圏障害に対する関係障害臨床の立場から、主に多動についてコミュニケーション構造との関連でもって検討してみた。われわれはややもすると行動を純粋に取り出して検討することが、科学の客観性を保つために最も重要であるかのように信じ込んでいるふしがある。しかし、人間関係の中で、行動そのものは常に客観的な意味を持っているのではけっしてない。行動の意味は常にその時の対人関係の質、つまりは当事者双方の主観のあり方によって容易に変質を遂げていくものである。その意味からも発達障害を呈している子どもにみられる多動を初めとした行動特徴を関係性の中で、つまりは文脈の中で捉えていくことは、子どもの心の発達を支えていく上で不可欠な作業であるといわなければならない。なお本稿で論じたコミュニケーション構造の問題はけっして自閉症圏障害のみに該当するようなことではなく、ひろく子どもを育てる際に共通する基本的な事柄であることを最後にお断りしておきたいと思う。

［参考文献］

鯨岡　峻（一九九七）『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房。

小林隆児（一九九八）「母と子のあいだを治療する－Mother Infant Unitでの治療実践から－」『乳幼児医学・心理学研究』7、1-10。

小林隆児（一九九九）『自閉症の発達精神病理と治療』東京、岩崎学術出版社。

小林隆児（一九九九）「関係障害臨床からみた自閉症理解と治療」『季刊発達』78、22-35。

小林隆児（印刷中）「乳幼児期の自閉症圏障害に対する早期介入－自閉症の関係障害臨床－」『別冊発達（渡辺久子・横本洋子編）特別企画「乳幼児精神保健の新しい風」』24。

小林隆児ら（一九九七）「乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象」『乳幼児医学・心理学研究』6、9-27。

小林隆児ら（一九九七）「東海大学健康科学部におけるMother-Infant Unitの活動紹介」『乳幼児医学・心理学研究』6、31-43。

松本　元（一九九六）『愛は脳を活性化する』岩波書店。

Richer, J.M.(1993). Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. Early Child Development Care, 1996. 7-18